

報 告

病棟保育士の医療に関する知識と
学習ニーズの実態調査住吉 智子¹⁾, 沼野 博子²⁾, 田中 美央¹⁾

〔論文要旨〕

目的：本研究は、病棟保育士の医療に関する知識および病児対応の学習ニーズを明らかにすることを目的とした。

方法：無記名式の質問紙を用いた横断調査を実施した。

対象：全国の小児専門病院および小児科を標榜する定床300床以上の病院に勤務する経験年数3年以上の病棟保育士に調査を行った。

結果：有効回答者78人(91.8%)、病棟保育士経験8.71(SD:6.8)年であった。全員が「医療知識は必要」と認識しており、ほぼ全員が学びたいことは「病院内での個別遊び」と回答した。

医療知識の習得への取り組み経験がある病棟保育士43人は、経験がない病棟保育士27人よりも、勤務形態が「常勤」(p=.003)、保育士以外の資格「あり」(p=.036)、院外研修参加経験「あり」(p=.003)、「看護師との意見の相違がある」(p=.019)、「病児の保育に不安がある」(p=.019)の5項目が有意に高率であった。今後、病棟保育士への現任教育として病児に適した遊びのガイドライン、および各病院での教育プログラムが必要であると示唆された。

Key words：病棟保育士, 医療に関する知識, 学習ニーズ, 個別遊び

I. はじめに

近年、子どもの入院生活を発達面から支援する専門職として、小児の入院施設で勤務する保育士(以下、病棟保育士)への期待感は年々高まっている。しかし、病棟保育士と看護師間では、情報共有の不足、保育士の医療的知識の不足に起因した、多職種間連携の課題が散見される^{1,2)}。特に、看護師からは『病棟保育士は疾患や病児の理解が不足しており、健常児と同様のしつけや行儀を求める』との報告もあり³⁾、福祉関連の専門職である病棟保育士の病児への保育は、期待が大きい反面、不安視する意見もある。医療安全の観点からも、病棟保育士は病児への日常生活を支援する専門職として、基礎となる医療的知識が求められていると

推測される。また同様に、病棟保育士も、保育所等で接する健康状態が良い子どもたちとは異なる対応を病棟で求められており、医療現場での保育実践には困難を抱えていることが考えられる。

今回、われわれはより良いチーム医療の推進をめざし、病院勤務の病棟保育士に対するキャリア教育プログラム開発の基礎資料を得るために、病棟保育士の医療的知識の必要性の認識と、その内容を明らかにしたいと考えた。

II. 用語の定義

病棟保育士：病院施設に「保育士」として雇用され、病児に保育業務を行う専門職とする。

医療的知識：本稿における「医療的知識」とは、病

A Survey of Knowledge of Medical Knowledge on Care for Children with Illness
and Learning Needs Response for Nursery Teachers in the Pediatric Ward
Tomoko Suniyoshi, Hiroko NUMANO, Mio Tanaka

[3004]

受付 18. 1.11

採用 18.11.29

1) 新潟大学大学院保健学研究科(看護師/研究職)

2) 前 新潟大学保健学科(看護師/研究職)

児への世話（食事，排泄，遊びや活動，睡眠や休息）を安全に遂行するための基礎知識とする。

Ⅲ. 対象と方法

1. 調査対象

2014年度版病院年鑑⁴⁾のうち，保育士が勤務すると推定される，全国の小児専門病院および小児科を標榜する定床300床以上の国公立私立大学病院，がん専門病院を選択したところ，171施設が抽出された。この施設で主として病棟で勤務する保育士を対象とした。なお，経験5年以上で専門的な保育が実践できるとされている⁵⁾。今回，保育所での勤務経験もある人が多いことを踏まえ，病棟保育士としての勤務経験3年以上の保育士に対し，調査用紙の配布を171施設の施設管理者に依頼した。

2. 調査期間

2016年8～11月

3. 調査方法

無記名の自記式質問紙による横断調査法とした。

4. 調査内容

- 1) 対象者の基本属性は，勤務所在地，性別，年代，病棟での勤務年数，保有資格として，それぞれ選択式で回答を得た。院内研修および院外研修の参加経験の有無は二択式で回答を得た。また病棟で担う業務内容は，個別保育，病棟行事運営，プレイルーム管理など15項目について，選択式で回答を得た。
- 2) 「保育士養成課程で習得する医療的知識に対する認識」は「4：十分である」～「1：不十分である」の4評定尺度とした。「疾患・病児に対する研修は必要と思うか」の設問は，「4：とてもそう思う」～「1：思わない」の4評定尺度とした。なお，医療的知識習得のための取り組みの有無，施設内研修・施設外研修の参加の有無は，二択式で回答を得た。
- 3) 病棟保育士の学習ニーズは，医療保育士養成のテキスト構成を参考として^{6,7)}，生活，医療処置，子どもの症状，家族の対応に関することを中心に研究者間で19項目を設定し，「5：とてもそう思う」～「1：全くそう思わない」の5評定尺度で回答を得た。
- 4) 「看護師との連携に満足しているか」，「看護師との意見の相違があるか」の設問は，「4：とてもそう

思う」～「1：思わない」の4評定尺度とした。「病児の保育は不安があるか」，「保育中，ヒヤリとした体験はあるか」の2設問は，「4：いつも感じる」～「1：全く感じない」の4評定尺度で回答を得た。

5. 分析方法

統計解析にはSPSS Statistics ver.22を用いた。単純集計および「医療的知識習得のための取り組み」と関連する要因の分析については，医療的知識習得のための取り組み「あり」群と「なし」群の記述式統計量を算出した。二択式の2群間比較はFisherの直接確率検定，数量データはt検定，4評定尺度での2群間比較はMann-WhitneyのU検定を用いた。有意水準は5%とした。

6. 倫理的配慮

施設管理者と保育士へ文書で研究の目的・方法並びに任意性の保証，個人情報・プライバシーの保護，利益とリスク，公表方法等の倫理的配慮について説明した。郵送法での質問紙の回収をもって同意したとみなすことを依頼書に明記した。本研究は，研究者が所属する大学の倫理委員会の承認（承認番号13B-146J）を得て実施した。

Ⅳ. 結 果

回答者85人（回収率49.7%）のうち，78人（有効回答率91.8%）を分析対象とした。

1. 対象者の基本属性

対象者の属性を表1に示した。対象者は全員，保育士資格を保有していた。それ以外でさらに保育関連資格を有する者は27人（34.6%）であった。病棟保育士経験年数は8.71年（Standard deviation:SD=6.8）であった。雇用形態は53人（67.9%）が常勤であった。病棟保育士が病棟で担う業務を表2に示した。業務内容は個別保育76件（97.4%），病棟行事運営75件（96.2%）など保育関連が高率であったが，滅菌物品管理15件（19.2%），検査送迎13件（16.7%）などの看護助手業務，服薬介助9件（11.5%）などの業務も一部担っていた。

2. 医療的知識の習得に関する認識

医療的知識の習得に関する認識について表3に示した。対象者全員が医療的知識は「必要」，「どちらかと

項目	n	%
性別		
女性	76	97.4
男性	1	1.3
無回答	1	1.3
病棟保育士経験年数		
平均±SD	8.71	±6.8
range		3-33
勤務形態		
常勤	53	67.9
常勤以外 (パート等)	25	32.1
保有資格		
保育士	78	100
医療保育専門士	7	9.0
HPS	10	12.8
その他	10	12.8
所属する施設所在地		
北海道・東北	5	6.4
関東	29	37.2
甲信越・中部	16	20.5
近畿・四国・中国	17	21.8
九州・沖縄	10	12.8
無回答	1	1.3

HPS：ホスピタルプレイスベシヤリスト

いえば必要」と回答しており、「不要」の回答はなかった。保育士養成課程で習得する医療的知識の認識は「十分」、「どちらかという十分」は11人(14.1%)であり、「どちらかといえば不十分」、「不十分」は合わせて67人(85.9%)であった。また医療的知識習得のための取り組みを、45人(60.8%)が実施していた。

項目	n	%
個別保育	76	97.4
病棟行事運営	75	96.2
プレイルーム管理	74	94.9
病棟装飾	73	93.6
集団保育	59	75.6
預かり保育	46	59.0
ボランティア調整	42	53.8
プレパレーション	20	25.6
滅菌物品管理	15	19.2
検査送迎	13	16.7
入浴介助	12	15.4
服薬介助	9	11.5
清拭	7	9.0
リネン・物品管理	5	6.4
入院オリエンテーション	5	6.4
その他	27	34.6

3. 病棟保育士の学習ニーズ

病棟保育士の学習ニーズを表4に示した。病棟保育士の学習ニーズの平均(SD)は、高い順に「病院内での個別遊び」が4.53(0.72)、「子ども・保護者の不安対処」が4.41(0.68)、「痛みのある子どもの対応」4.32(0.84)、「保護者との情報の共有方法」4.30(0.69)、「易感染状態の子どもの対応」4.29(0.78)と続いた。

4. 医療的知識習得のための取り組みに対する関連要因

病棟保育士の医療的知識習得のための取り組みと、基本属性等の関連を表5に示した。質問に回答した70人を対象として、医療的知識の習得のための取り組み

項目	n	%
医療的知識は必要か		
必要である	53	67.9
どちらかという必要である	25	32.1
どちらかという不要である	0	0.0
不要である	0	0.0
保育士養成課程での医療的知識の習得は十分か		
十分である	1	1.3
どちらかという十分	10	12.8
どちらかという不十分	30	38.5
不十分である	37	47.4
医療的知識習得のための取り組みをしたことはあるか		
あり	45	60.8
なし	29	39.2

表4 病棟保育士の学習ニーズ n=78

項目	Mean	SD
病院内での個別遊び	4.53	0.72
子ども・保護者の不安対処	4.41	0.68
痛みのある子どもの対応	4.32	0.84
保護者との情報の共有方法	4.30	0.69
易感染状態の子どもの対応	4.29	0.78
病院内での集団遊び	4.25	0.91
感染症の子どもの対応	4.14	0.81
病棟行事	4.14	0.84
点滴をしている子どもの対応	4.08	0.78
術後の子どもの対応	4.05	1.00
安静指示のある子どもの対応	4.03	0.85
プレパレーション	4.03	1.09
食事制限のある子どもの対応	4.01	0.87
発熱している子どもの対応	3.93	0.93
下痢嘔吐のある子どもの対応	3.89	1.01
ギプス装着の子どもの対応	3.57	0.93
子どもへの内服方法	3.50	1.23
子どもの移送	3.16	0.96
子どもの沐浴・入浴方法	3.01	1.01

学習ニーズは「5. とてもそう思う」(5点)～「1. 全くそう思わない」(1点)を得点化し、平均値を算出した。欠損値は除く。

「あり」43人、「なし」27人と2群に分類した。医療的知識の習得のための取り組み「あり」群が、「なし」群よりも有意に多かった項目は、勤務形態が「常勤である」、保育士以外の資格「あり」、院外研修参加経験「あり」、看護師との意見の相違がある、病児の保育に不安があるの5項目であった。

V. 考 察

本研究では、対象の病棟保育士の全員が、「医療的知識は必要と思うか」の設問に「必要」、「どちらかという必要」と回答し、不要と考えている者はいなかった。また「保育士養成課程で習得する医療的知識に対する認識」については、80%以上が「不十分」と回答した。このことから、病児への保育には医療的知識は必要と考えており、そのための知識は保育士養成課程の習得だけでは不足であると捉えていることが明らかとなった。これは、保育士自身が、病児や疾患の理解の不足を自覚しているとした報告と一致する⁸⁾。

では具体的に、病棟保育士はどのような学習ニーズをもっているのだろうか。最も学習ニーズが高い内容は、「病院内での個別遊び」であった。「遊び」とは、看護師が保育士に最も期待し、保育士の専門業務と認

表5 病棟保育士の医療知識習得のための取り組み2群と属性や特性との関連 n=70

質問項目 (選択肢)		医療知識習得のための取り組み				p 値
		あり n=43		なし n=27		
		n	%	n	%	
雇用形態 (常勤である / 常勤以外) ^a	常勤である	34	79.1	12	44.4	.003
保育士以外の資格 (あり / なし) ^a	あり	16	37.2	4	14.8	.036
院内研修参加経験 (あり / なし) ^a	あり	26	60.5	12	44.4	.224
院外研修参加経験 (あり / なし) ^a	あり	33	76.7	12	44.4	.003
		M	SD	M	SD	
病棟保育士としての勤務年数 (M ± SD) ^b		8.44	3.14	6.75	4.96	.230
一般保育施設での経験年数 (M ± SD) ^b		5.92	4.83	8.44	6.08	.142
保育士養成課程での医療知識の習得 ^c	(4 : 十分である ~ 1 : 不十分である)	1.88	0.32	1.89	0.32	.598
疾患・病児に関する研修は必要だと思う ^c	(4 : とてもそう思う ~ 1 : 思わない)	3.70	0.47	3.68	0.48	.870
看護師との連携に満足している ^c	(4 : とてもそう思う ~ 1 : 思わない)	2.79	0.60	2.61	0.63	.220
看護師との意見の相違がある ^c	(4 : とてもそう思う ~ 1 : 思わない)	3.07	0.69	2.71	0.60	.019
病児の保育に不安がある ^c	(4 : いつも感じる ~ 1 : 全く感じない)	3.47	0.63	2.93	0.90	.019
保育中、ヒヤリとした経験がある ^c	(4 : いつも感じる ~ 1 : 全く感じない)	3.02	0.41	2.96	0.51	.059

^a Fisher の直接確率検定, ^b t-test, ^c Mann-Whitney U-test

M=mean, SD=standard deviation

識している項目である。そればかりではなく、看護師は「遊びを保育士から教えてもらいたい」とも考えており⁹⁾、病棟保育士自身も「遊び」は専門業務と認識している¹⁰⁾。このように、病棟保育士にとって専門性が高く、看護師からも指導を欲している「遊び」を、なぜ病棟保育士はさらに学びたいと考えているのだろうか。

「病院内での個別遊び」に続く高い学習ニーズの「子ども・保護者の不安対処」は、保育所の健康な児とは異なり、繊細で慎重な対応を必要とする項目であり、「痛みのある子どもの対応」も、痛みの原因や誘因、痛みの種類によりその対応が異なるので、難易度の高い項目と考えられる。これらを考慮すると、病棟保育士にとっての「病院内での個別遊び」の学習ニーズが高い理由は、病児の疾患や健康状態を踏まえた、より安全に配慮した遊びの内容への知識獲得への期待と推察する。集団保育の経験しかない保育士は、病室での個別保育に不安があるとの報告からも¹¹⁾、「病院内での個別遊び」への学習ニーズは、不安軽減の側面があると推察できる。

しかし、福祉職である保育士が、疾患や病状に適した病院内での「遊び」に関する知識を独学で身に付けるのは容易ではない。今回の結果では、60%以上の病棟保育士が医療的知識の習得のために何かに取り組んでいることが示された。「医療的知識習得のための取り組みあり」の病棟保育士の傾向として、雇用形態が「常勤」、「保育士以外の有資格者」、「院外研修に参加経験あり」、「看護師との意見に相違がある」そして「病児の保育に不安がある」であった。この理由として、複数の保育系資格の保有者であることから基本的に学習意欲が高い人たちであること、また非常勤雇用が多い中¹²⁾、「常勤」として保証された雇用と責務を担っており、院外の研修にも参加しやすい立場であるからと考えられる。

さらに今回、着目すべき点として、「看護師との意見に相違がある」、「病児の保育に不安がある」保育士の方が、より医療的知識習得のための取り組みをしていた。保育士と看護師との協働に関しては、保育士が感染症と非感染症の小児を区分しない遊び方をするとの問題、病児の安静度の理解不足など、安全管理上の課題が散見される¹¹⁾。同時に情報共有不足の報告も多い¹³⁾。そのような中で、病棟保育士は看護師との、病児への対応の考え方の相違、協働の課題を「意見の相違」として気づいていたと考えられる。また日々、病

児に対しての保育に不安感をもっていることも明らかとなった。今回の調査では、具体的な不安の内容は明らかにできなかったが、一部の病棟保育士が、病棟で担う業務の中に「プレパレーション」や「服薬介助」など、医療に係る業務も含まれており、病棟での「保育」内容の多様性も不安感の背景にあると推測する。

このように、病棟保育士の医療的知識の習得のための取り組みの動機は、保育上の必要性や不安感と表裏一体であることを今回の研究で明確化することができた。このことは病棟保育士に早期からのキャリア教育を現任教育として提供し、病児の保育に不安や怖さ、疑問を解消するよう手立てを講じる必要性を示唆している。

施設の規模や地域特性により小児の疾患の傾向や治療内容は異なり、病棟保育士の保育上の不安も異なると考えられる。まずはその施設ごとの保育士の不安要素を手がかりに、病児に適した遊びのガイドライン、そして病棟保育士の視点を踏まえた病棟保育士の教育プログラムの整備が必要であることが示唆された。

VI. 結 論

1. 対象の病棟保育士は、全員が「医療的知識は必要」と認識していた。
2. 病棟保育士の学習ニーズの上位3項目として、高い順に「病院内での個別遊び」、「子ども・保護者の不安対処」、「痛みのある子どもの対応」であった。
3. 医療的知識の習得のための取り組み「あり」の病棟保育士は、取り組み「なし」の病棟保育士と比較して、勤務形態が「常勤である」、保育士以外の資格「あり」、院外研修参加経験「あり」、看護師との意見の相違「あり」、病児の保育に不安「あり」、の5項目が有意に高値であった。
4. 今回の結果から、病棟保育士には、病状に適した遊びのガイドラインと、教育プログラムが必要であると示唆された。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は78人であり、結果の一般化には慎重を要するが、病棟保育士の医療的知識を含めた学習ニーズの現状の一端は明らかにできたと考える。今後は、病棟保育士が勤務する施設の特徴を踏まえた不安要因の明確化と、学習ニーズに合わせた教育内容の抽

出が課題である。

本研究はJSPS科学研究費15H03451の助成を受けて実施したものである。

文 献

- 1) 深谷基裕, 伊藤孝子, 江本リナ, 他. 子どもが入院する病棟の保育士と看護師の協働—保育士が専門性を発揮できないと感じる背景—. 日本小児看護学会誌 2008; 17: 24-31.
- 2) 中村伸枝. アンケート調査にみられる, 看護師, 病棟保育士の実態と問題点. チャイルドヘルス 2012; 15: 545-547.
- 3) 飯村直子, 江本リナ, 川口千鶴, 他. 医療施設における看護師と保育士の連携の実態: 健やか親子21推進事業 小児の入院環境向上のための活動. 日本小児看護学会誌 2008; 17: 66-72.
- 4) 新社会システム総合研究所. “2014年度版病院年鑑” <http://www.ssk21.co.jp/index.html>. (参照2016-04-10)
- 5) 谷川夏実. 初期キャリアの保育者の危機と専門的成長に関する研究動向. 教師学研究 2015; 16: 13-22.
- 6) 日本医療保育学会編. 医療保育セミナー. 東京: 建帛社, 2016: 184-202.
- 7) 帆足英一. 基礎解説編 医療保育士養成の現状. 小児看護 2009; 32: 1030-1035.
- 8) 中村伸枝, 宮本茂樹, 松浦信夫, 他. 小児病棟で働く保育士の活動実態と病棟保育で役立っている保育士としての教育や経験. 小児保健研究 2013; 72: 558-563.
- 9) 甲斐恭子, 関 佳子, 谷川弘治. 子どもの療養生活にかかわる看護師・保育士・教師が作成した個別支援計画の現状と課題. 小児保健研究 2016; 75: 511-518.
- 10) 下山京子, 佐光恵子, 下田あい子, 他. 入院中の子どもの遊びに関する病棟保育士の認識. 日本小児看護学会誌 2013; 22: 49-56.
- 11) 松浦和代. 病棟保育士導入期の成功例・失敗例. 小児看護 2009; 32: 1117-1122.

- 12) 鈴木美佐, 流郷千幸, 村井博子, 他. 小児病棟における保育士の雇用に関する実態 公立総合病院の看護部長による回答から. 聖泉看護学研究 2017; 6: 53-60.
- 13) 山北奈央子, 浅野みどり. 看護師と医療保育士の子どもの尊重した協働における認識: 医療保育士の専門性に焦点をあてて. 日本小児看護学会誌 2012; 21: 1-8.

[Summary]

Purpose : The purpose of this study was to assess medical knowledge and learning needs on care of children with illness in pediatric ward nursery teacher.

Methods : Cross-sectional study using anonymous questionnaire was used.

Subjects : The subjects comprised 78 (91.8%) of three or more years of experienced nursery teachers who working at a pediatric hospital or hospital with a pediatric department, where it has 300 or more hospital beds.

Results : All subjects recognized the necessity of medical knowledge on care of children with illness. Almost of all subjects answered that they were interested in learning “individual play within the hospital.”

As for subjects who made an effort with acquiring medical knowledge, following 5 items were high rate: “A full-time worker” ($p=.003$), “Do you have qualifications other than nursery teachers” 「Yes」 ($p=.036$), “Have you participated in out-of-hospital training” 「Yes」 ($p=.003$), “Felt differences in opinion with nurses” ($p=.019$) and “Concern about nursing care for children with illness” ($p=.019$).

Our findings suggested that both guidelines of play suitable for children with illness and educational program are necessary.

[Key words]

nursery teachers in the pediatric ward, medical knowledge on care for children with illness, learning needs, individual play within the hospital